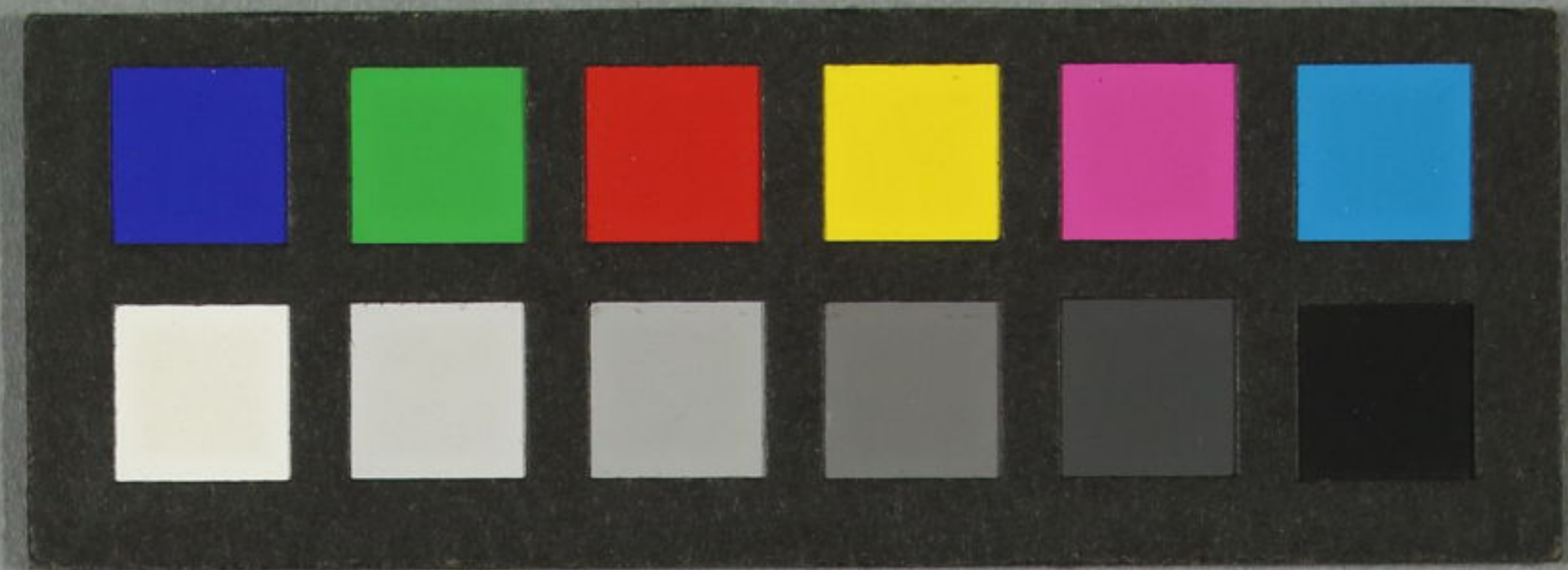




俳諧袖珍鈔
六

5
1128
6





袖珍抄百韻之部卷四

古泉舍默池輯

次韻

表

晉伯倫傳酒德頌樂天繼

以^ス酒^ヲ以^テ讚^ム昔^ノ追^テ之^ヲ續^ク信^ニ德^ヲ主^ト

百五十韻

二百五十句

[illegible]

路の足指子腫れく強きて

這句以_テ莊子_ヲ可見矣 其角

強骨比力たふし不味すてに 才藝

志々々々々々松工坊うき揚水

爰より來てひきを待つ子規 角

燈心草と通し 老人月 西

激面ゆく麻うゝ山は木立う
水

藥工解さく素もこれなり 唐

後すゝ画眉と客と嘆つ人

次韻

[illegible]

水 變 角 水 角 廣 死 水 廣 角 水 角 廣 死 楊水 才廣 其角

為の院の所被せし
 爲の院の人花よりあり
 子丑れ書を家よりけり
 渾沌翠より常き書より華
 然嘆ふむむる花しの山
 中のお女房に散はるるあり
 ようと来君をぬすみさる
 棒軍勇やつゆき止りて
 つき白けれなり梓又強引
 富の家をば明らけりま
 摩訶訖多若吾奈園より
 雲を抄子と抄^{上レ}屋^{ニヤアヒコシ}
 何々と落てゆくあり吹
 折れ合ふなり採是ける終
 証問の書より人より後立
 月の秋のみとく且たて
 赤きあつむ姉の落髪
 もれつて焼く魚の釣りみよ
 法と酒りの此無きして位
 小袖の末松より草より更

角 南 廣 苑 水 廣 角 水 苑 角 廣 苑 水 廣 角 水 苑 角 廣 苑

水 廣 角 水 孫 角 廣 孫 水 廣 角 水 孫 角 廣 孫 水 廣 角 水

藥角磨藥水磨藥角水藥角磨藥水磨藥角水藥角磨藥

初夢をさふおぼろけさむしう
瓶の聲く 睡 入ル 角

同 除 集

附 替じりりなききう日る者 楊水
各用の枝とまゝ大衆 角
歌ふ良れおぼろけさむしう 其角
夢一程の四虫をきき 才九

初 懷 紙

月れまをさふおぼろけさむしう 其角
初夢をさふおぼろけさむしう 其角
雪村の柳えふり揮さて 松竹
ほの懐入あいの月 二角
秋れ山も水も引れおぼろけ 其角
炭竈こひてききう 松竹
里のまはりのおぼろけ 仙化
我のさむしう雨おぼろけ 其角
おぼろけさむしうおぼろけ 其角
夢一程の四虫をきき 才九

阿ふく連ふれ無きき 其角
歌ふ良れおぼろけさむしう 其角
附 替じりりなききう日る者 楊水
各用の枝とまゝ大衆 角
歌ふ良れおぼろけさむしう 其角
夢一程の四虫をきき 才九
初夢をさふおぼろけさむしう 其角
雪村の柳えふり揮さて 松竹
ほの懐入あいの月 二角
秋れ山も水も引れおぼろけ 其角
炭竈こひてききう 松竹
里のまはりのおぼろけ 仙化
我のさむしう雨おぼろけ 其角
おぼろけさむしうおぼろけ 其角
夢一程の四虫をきき 才九

齒原のふたつ一様れ宿 宿
 三子ウの月夜半は母をじ 尺
 雪もれくくひきと秋つ 子
 小春のふたつおけりやあはれ 子
 霧の宿を河りり一宿 似
 夢入五夜の流すの細 似
 目と霧のうつ不二の標上 似
 松葉の社文書と下に雲を 樹
 峰より 雲の密柑結る 葉
 戒トお大いふ能ききや 水
 旅小刀の吼ぬけてり 水
 吾作本や世のねとをわ 角
 かすすの夜にふくし 量
 橋上は霧をい清と煙を 葉
 西瓜い 子
 三つとてまては有るは柳 水
 月を葉にたききや 樹
 道世のふくまきと歌を 弱
 つきま耳ふたつと一系 水
 歩ふふてふふと人後落 角

百時の家へ入て後切 葉
 是は手先祖の櫓の火は渡 昨
 時ふくは来りける 子
 而とて下下の村を園を 米
 雲居小橋をききききき 水
 衣袋よりえききききき 樹
 雪ふきききききききき 角
 市地清麗後の後ききき 水
 葉ふきききききききき 水
 張れはふきききききき 水
 世は情 人 秋 の 樹
 月に向ふ山寺とのと都成 角
 石をさききききききき 葉
 第本の茂きききききき 子
 してきききききききき 水
 袖入 嬌美とあうきき 水
 清れ玉けりけりききき 水
 我軍り純きききききき 水
 胸思君 境所とつと 角
 肩と清ききききききき 水

奥うくの市並 隔^れの埒 為
 無火を刀よりけくあふ山
 浪ハ井續^りはかろす落人
 物^すは^す盟と^すせく^すき^きに
 壁つゝ白^くは^くは^くは^く
 市^はれ^はし^しを^をた^たて^て
 日傘さす子と煙と男と
 玄^く驛^りを^をけ^けき^きし^しの^のり
 花^はと^とも^も照^すす^す松^松板^板打
 花^はの^のお^おく^く盗^盗人^人持^持り^りて
 ハ^ハを^をし^しま^ま飛^飛り^りふ^ふ毛^毛
 い^いろ^ろつ^つと^と豆^豆腐^腐は^はて^て落^落ぬ^ぬ
 山^山と^とを^をけ^けり^りし^し 榎^榎は^は下^下あ^あ
 手^手水^水桶^桶を^を虎^虎皮^皮抽^抽け^けり^りて
 こ^こぬ^ぬり^りみ^みて^てし^しの^のを^をれ
 阿^阿の^の向^向ハ^ハ所^所は^はか^から^らる^る雲^雲火^火
 猿^猿子^子と^とた^たし^しと^と峰^峰の^の松^松と
 影^影り^りの^の岩^岩根^根の^の床^床は^はき^き氣
 お^おり^り通^通さ^さふ^ふた^た末^末の^の浪^浪
 赤 子 咳 付 究 菜 昨 毛 角

備ふを御秋急係替れそ
あいにしけは峰をりて
隠居のいかりをきねそ
おのほきふし松のりぬを
重砂子お拂ふも文代の秋
みうの終末のお慶賀月
木賊新山をりるごとく
落し枝の本をた麻を
方と雲を何ぞうみて鶴鳥
糸のいとうを吹森は木うじ
楊柳をそ及の柱のふくみ
そ者れとき君こそ何ぞ
佐々木するふれの清やひも
梅ののころと春をうする
花のまを鑑山をうする
雲を雲れとろふきふか
白砂の粒をうする沙を
ふくまの端を何やめ
春のふくまを西のほを
費ふは夜の五時の月

鶴は骨のくもて重た月
 又ありて九山の色
 には基盤おれ来花をて
 うすみのろくろ猪をすた
 三 立まや系掛有くまの肉
 殺引御守きを焼く
 市休中吉あつくきれの夜来
 片く兵 能 大 根
 せ魚居先をけんかき野
 常のふ未未共れゆき
 因果の史群れ血をすま
 喜男若四くたせのり
 又又孔子字は太二郎
 時より何よりをを
 不心中ききすくそ物せん
 君ら嘆留我やてつ
 志の事共取ひはるま月
 秋さきさぬ中け再は
 三 寂滅の貝ふききるお花
 石の川めある山本の雪

大地表ついで龍やのりん
 長十丈の餘ちりりや
 かすねの橋板まて度
 魚井微田より糸包丁
 ぬ能極や中よれい
 粉糖こけれく時雨おきん
 六花の伊勢の山けやま
 海内をまぬくろ林風
 されてい飯匙をす袖
 魚を福やと梅ころ月
 待きさる婆急死もあ
 三 立まより西瓜
 新玉の恒泉かきす
 代ハち序者めつし
 何云すはのふと所去
 たりけねいけり世に
 にはふい世後明て候
 弓ののりたより赤い
 そをわつとやあ人のん
 赤子別五粒つてのむ

虎の尾に葉を敷きおのゝろく
 織部殿のふも茶の旧恥
 沖一ッ番民これと雲聚す
 けんとし草まよふ山端に
 小半は市子帰る月も月
 屋平流じ雛子の寄
 雲の風も山莊院ふかれり
 かゝるれ天下地をなす
 信いあやうき人形はなも
 海士の母うゝいのゝに
 阿やう新若火は夜も夜
 八雲豆腐をこりぬき
 面影のおろし大根を皮て
 あうり障子よりすじぬ月

於四友亭真り

次々を秋志実を長秋を
 木のくの浦うとて月
 沖れん玉登る袖の芳を
 足きゝれてや唇のうゝん

山姥のふれふふふふ
 あゝあゝあゝあゝあゝ
 羽渡美藤子やうねさく
 林とあはれつらゆゆく
 ぬす人と三益のまやゆん
 大月の神さゝくへらさる
 子雞のや公儀より馴く
 作室老よ冬白雲の神
 至以巾帯またむふふふ
 洲寄れねのひよりねさ
 ちちちあゆの坊の子と
 庭れあやう機がしらん
 又やあやう屋門のわらひ
 南村四百八十目 来
 青野山とて武士の世より
 浪三すきとまふふふふ
 花の庭月の夜を秘めけ
 春折とまき女房のつる
 血れさきさき雲目けさの
 胸のそつとさきさき

孫 善 孫 善 孫 善 孫 善 孫 善 孫 善 孫 善 孫 善

去弱去病去毒去邪去惡去穢去癰去瘡去腐去積去滯去瘀去風去濕去熱去寒

[illegible]

野也腹より流る儀ありん
 八万法を經方子能く
 揚進や十方世界のりた
 凡いのちの赤土の
 の川すゝら蛇蝎賣れむ秋
 と流るぬすに杖てゆく月
 弱とめて少病者よく雪は
 東放う小川の竹の一ひ
 世里へ石すりの文のふたり
 狼子の腹木猿魚の子せ
 去閑志れ山の紺地の青草じ
 に合ふたえて養功のじ
 雲原若童相闘し根持る
 吹矢とわく墨塗の月
 秋の嘉瑞の柔草もくもぬ
 まゆ虫鈴虫響きたる
 燕子を逐てもく末くれ
 る葉平し清人やあき
 鳥糞をけり花雪をさす時

情以ハ人を宛てて
 者之ず事成れて事なり
 量多量少を其の教極
 君之ハ人の先を以て
 志けりて事なりと云
 志弱ハ由親王の御
 乳母之ハ人の先を以て
 庖膳の計思非ありとも
 中てや面を洗費の事
 高き布れを以て事なり
 相を以て代の事極なり
 水降の事と云ふ事なり
 うけこれをして事なり
 火雷なりと云ふ事なり
 常事なりと云ふ事なり
 江戸此茶延壽の事なり
 湯白きと云ふ事なり
 さるる事なりと云ふ事なり

香丹月橋の粧ゆゑに
 すりゝ山りゝ悉皆成佛
 凡性の眼の光り湯の精
 揉睡の焚きう因果すまら
 あひやゝとさすひとつての思ひの
 あきうのゝとて十貫目銀
 大八やあつひの年のあやん
 月唐とめゝて冬屋の若
 山莊の柿渾く尻うけ
 青葉の面白羽折きや
 青葉の木寧ろぬみあすん
 ところのさうに不偏青
 山高く酒舟橋うみまじ
 海万のなう揺るう魂
 白あゝ一花の雲霞の怪
 甕取巾と約いゝと美
 態板もかちとみ引きて
 山中く山や三風の九都介
 算より新あきとやと若
 松や茂く酒代ととく

此梅はもとゆきと啼つて
 ずいやく花人万北作
 妻高の影をよれり其れ
 那味啼すやの時空の下
 招神とあまをすうとも
 むうとてこれの男阿う
 勝のひけそえとて其の月
 瓜わてゆく阿の山
 云すはとてこれの女
 ひく阿の山阿の山
 此梅はもとゆきと啼つて
 ずいやく花人万北作
 妻高の影をよれり其れ
 那味啼すやの時空の下
 招神とあまをすうとも
 むうとてこれの男阿う
 勝のひけそえとて其の月
 瓜わてゆく阿の山
 云すはとてこれの女
 ひく阿の山阿の山
 此梅はもとゆきと啼つて
 ずいやく花人万北作
 妻高の影をよれり其れ
 那味啼すやの時空の下
 招神とあまをすうとも
 むうとてこれの男阿う
 勝のひけそえとて其の月
 瓜わてゆく阿の山
 云すはとてこれの女
 ひく阿の山阿の山

此の阿はもとゆきと啼つて
 ずいやく花人万北作
 妻高の影をよれり其れ
 那味啼すやの時空の下
 招神とあまをすうとも
 むうとてこれの男阿う
 勝のひけそえとて其の月
 瓜わてゆく阿の山
 云すはとてこれの女
 ひく阿の山阿の山
 此梅はもとゆきと啼つて
 ずいやく花人万北作
 妻高の影をよれり其れ
 那味啼すやの時空の下
 招神とあまをすうとも
 むうとてこれの男阿う
 勝のひけそえとて其の月
 瓜わてゆく阿の山
 云すはとてこれの女
 ひく阿の山阿の山
 此梅はもとゆきと啼つて
 ずいやく花人万北作
 妻高の影をよれり其れ
 那味啼すやの時空の下
 招神とあまをすうとも
 むうとてこれの男阿う
 勝のひけそえとて其の月
 瓜わてゆく阿の山
 云すはとてこれの女
 ひく阿の山阿の山

あどすむる字樂の船 枝
肌のきぬ女のかやうなり 生
あめすや終て我うつるき 枝
もまうと本より鳴成聲 枝
うみありよう情のすけり 枝
音も伝へずれは只四半 枝
物もあきゆる計のあきや 枝
我もすゝ虫か金魚の煙のみ 枝
むりゝとあつ月れゆ暖 枝
黄うるたよ米桶里ちる 枝
離愛のめたあつゆり 枝
襟の羽や赤き枝はゆらん 枝
もこれとを枝はゆらん 枝
じきあふ本虫はか角れて 枝
月鏡して見てすゝ暖月 枝
それをぬす人のふゆあ 枝
志うふみくす人のふゆあ 枝
妙はの枝は空生れくかえ 枝
病ひのあてゆりくゆあ 枝
てのいむくひをむ枝はれ 枝

あどすむる字樂の船 枝
体さう心も枝はれゆ 枝
のみきるあどすむる 枝
入山はゆりゆり 枝
あめすや終て我うつるき 枝
もまうと本より鳴成聲 枝
うみありよう情のすけり 枝
音も伝へずれは只四半 枝
物もあきゆる計のあきや 枝
我もすゝ虫か金魚の煙のみ 枝
むりゝとあつ月れゆ暖 枝
黄うるたよ米桶里ちる 枝
離愛のめたあつゆり 枝
襟の羽や赤き枝はゆらん 枝
もこれとを枝はゆらん 枝
じきあふ本虫はか角れて 枝
月鏡して見てすゝ暖月 枝
それをぬす人のふゆあ 枝
志うふみくす人のふゆあ 枝
妙はの枝は空生れくかえ 枝
病ひのあてゆりくゆあ 枝
てのいむくひをむ枝はれ 枝

曉や空を穿きぬく幾月 國分
夕つりと仙の指の雪の 柳歌
層々むく人あき里もあけ 宇我
かゝる牡丹の名と度めり 吉芳
然くは万すゝとれ上りぬ 良田
森の角とけすす藤く 風美
本より何れも新張の霜とら黄に 雨
初かみあまに物監る義 木白
るの鶴あててはね梅花 秋
おとせとすは連縄のけ 配力
伊勢の海より糸巻をすき 末
かゝれたの首と膝と古々 風
村人いずのむらゝなり 芳
結江門流とるうりし 雨
造る物とてきの酒も甘に 雨
月も名跡のふたをきり 力
殊よりや海は鶴の生ぬ 風
かみあまに手冠の芭蕉葉 麦
そはくくの糸は雲の影を 菰

ゆゑにや 傳次のを 芳
此の二腕のふとそ 白
肩のねめり竹はさし 秋
袖の雪留り不尺やむか 冷
もあれて大の鶴と追ふ 麦
華礼はあけりては 雨
女笑する昨れ戸の内 芳
後ねのいのこは縁を 雨
宵中かきくから 白
をれは揺れ中花たりぬ 秋
手とひるえんは 力
あふれとれくも 白
かゝるもろくや 雨
七タは屋とかし 風
あゝりて 菰
柿の木の枝をたぐ 麦
飛てすゝと 芳
二つ 秋
わすの星とつむ 白
雲の爪はくす 雨

ねへ一斗山の神く
 乞食てあまそき摩羅
 終るく途を悔ひて
 其あまやうく破れおひて
 ちるぬすれ歌をうつむ
 以て大を替あひて
 家のうき来て色色は
 引うく高瀬の落きま
 月には雲拭てうき
 月あまかへれあまき
 きぬくおのちのき
 力

後虚栗

旅人と我をまねん
 中へんを宿くわて
 時勢の公はと世のたれ
 狼をふくく山陰の勢
 かけあやうきまはるの
 新しうき月と花とや
 中の秋画工一けれ

鶴くしておくる
 神曲や深きむく
 鶴と音をうれ
 何のふきそ
 九月の雲を
 裸はる神は
 落一面の
 乃ちぬ里に
 月とやあふ
 高きと白ひ
 おもふぬ
 途中ふた
 沖く船は
 ちあふま
 けりう
 順に
 苦れぬけ
 老の
 君は
 明き

命とあり人船と云ふ幅
 船出てもあはれうん海の上
 ちくぬ常寺とたのむるの
 舞や石をむ坂の目けり星
 小畑さびしき葉山伝へん
 そは空のそとをほ價おきれ
 はのえんをいと妹とを今
 著はあめり面白きうきふ
 職かゝて氏の大主
 所敷せぬ前次あらふ事考
 傳くさうく孺とさな枝
 足るゝと冬は高き雪を
 博れしき蜀をゆへる
 深きあやま市田は文を
 茂りゆく海苔すゝみ次
 谷深き目くれぬの本日の
 春とあはれいふまは山雪

田代中ノ小堀とある事詳し
 芝草をさつて月餅なる
 其の時祖父めてをかく
 傷て来りて是れ病か
 小堀と其の病後と云ふ
 といふやうな事なす所
 義合せ相報のころ最
 故の依れいといふお先
 手やそちの豆種は逃し
 して酒のむけりものか
 せうくと板屋のやうな
 稻ぬと人の縄をぬやう
 月見親へ報は不足出基
 とおれておへ何処へい
 飯は刺ておとるへ持
 仕付て居す算方の客
 田と極むむい近所の
 手ありし宵の神
 此中意為不適意句
 多故不端韻而終云

